

# 直江兼続と朝日軍道

木村 喜代志

## <はじめに>

朝日連峰の主稜線、狐穴・以東岳の間の南斜面と西朝日岳の南東斜面に、今日でもわずかながら目でたどることのできるジグザグの古道がある。風雪にさらされ、草木に埋もれているが、戦国動乱の歴史を深く刻み込んだ「朝日軍道」ではないかとされている。

この伝説にも似た古道を庄内側、旧朝日村鱒淵から、戸立山、茶畑山、三角峰、以東岳、狐穴、三方境、寒江岳、竜門山を経て大井沢に下山する春山ルートとして、30余年前に利用したことがあった。行動の大半が濃霧の四壁に囲まれた山行だったが、甲ト明神(兜岩)の奇岩が立ちはだかり、氷結したブナ原生林が林立していた。その果てには、氷雪に輝く朝日連峰の主稜が横たわっていた。

## <朝日軍道について>

朝日連峰の歴史をひもとくと、役ノ小角開山説や細々とした山岳信仰・修験道登山などが出てくる。しかし、近代登山の開拓期は、大正年代の沼井哲太郎氏の驚異的な足跡、朝日鉱泉の案内人・吉川房吉氏、山崎浩良氏、大江平助氏、山形高等学校山岳部などの活躍期という

ところが昭和初期、稜線上に残る古道に注目した佐藤栄太氏<sup>(\*)</sup>によって、「朝日軍道」が公表された。原始性の高い朝日連峰に、戦国動乱の古い歴史が刻まれていたのだ。軍道開伐の年代は推定の域を出ないが、草岡文書によると慶長4年(1599)正月26日、源右エ門という人が上杉藩から、庄内新道の御小屋番をおおせつけられている。従って、慶長3年には完成しているのではないかと想像される。

また、当時の社会情勢を探ってみると、陸奥会津を領していた蒲生氏郷の死後、豊臣秀吉の命を受け上杉景勝が慶長3年(1598)会津に移り、会津4郡をはじめ仙道7郡と出羽国長井、田川、櫛引、遊佐の各郡、佐渡国3郡を併せ120万石の大封(領地)を受けることになった。そのうち米沢と庄内の30万石を上杉の武将、直江兼続が領有したとされている。

しかし、16年前の天正10年庄内を勢力下においていた最上義光が、米沢と庄内の中間に位置する村山と最上を固めており、再度庄内を支配下に入れようと秀吉、家康に訴えを起こしていた時でもあった。

秀吉の死後、上杉は豊臣に、最上は徳川につき、庄内を巡っての争いは日

増しに激しさを増していった。兼続にとり本拠地の米沢と庄内とを結ぶ連絡道は、一旦越後に出てから庄内に向うか、小国を経て村上に出る方法のみであった。

宿敵最上氏を前にして、一朝ことがあれば米沢と庄内が分断される恐れが多分にあった。それで、関が原の合戦を控えた兼続は、自領の朝日連峰の主稜線をたどり、一路直ちに庄内に達する軍用道路開伐の大土木工事を起こしたことは容易に想像できる。

以上のことから、完成を慶長 3 年とすると、兼続が入部した年にあたり、一夏の工事ということになる。海拔 1500 から 1800 ㍍に於ける大工事なのでかなりの人海戦術が取られたものであろう。同時に、この軍道に注いだ兼続の気迫のようなものをも感じ取られる。

この軍道の経路を記載した「出羽庄内大山尾浦尉山階道 みち行改帳」や、これまで発表されたもの及び鱒淵で耳にしたことなどによると、鱒淵を基点として、鱒淵沢にかかる長慶滝を経て、通称鱒淵山(778m)に達し、鍬台置、猿倉山、早坂七十三曲、甲ト明神(現在の兜岩)、高安山、御小屋の平、葛城山、芝倉山、茶畑山、戸立山、三角峰、ウツボ峰、以東岳、狐穴、三方境、北寒江山、竜門山、西朝日岳を経て大朝日岳に達し、三十三曲坂(現在の大朝日岳から平岩山へ急坂)、平岩山、御影森山、焼野山、葉山神社を経て草岡に達している。距離にして約 60 kmにも及ぶ大規模なものである。

昭和初期には、兜岩北面はじめ、戸立山と以東岳の間、以東岳と狐穴の間、西朝日岳南面、御影森山西面、焼野平と葉山の間、その痕跡を認められたと佐藤栄太氏によって報告されている。しかし、今日では狐穴と以東岳の間、西朝日岳南面にわずかに雷光形を遠望できるに過ぎない。近づいて見ると、チシマザサやシャクナゲが密生しており、軍道を辿るところかその存在すら確認できない状態である。

日本に残る有名な軍道として、甲斐の武田信玄が釜無の谷を経て北信州を侵攻するときに通った信州の大門峠(1442m)、武田信玄が信州から飛騨を侵攻するときに通った信州と飛騨の国境である安房峠(1812m)、さらには、佐々成政が飛騨を通らず越中と信州を直接結んだザラ峠(2353m)を越え、黒部川を渡り、針ノ木峠(2541m)を越えるものなどが知られている。

これらは朝日連峰を凌ぐ高さだが、全て峠越えである。これに比べて朝日軍道は、東北の豪雪地帯に横たわる主稜線を延々と辿るものだけに、単に高度だけでは比較できない困難さがあったと思われる。それにもかかわらず、人知れず歴史に埋もれ、陽の目をみないままに消え去ろうとしているのは軍道の宿命でもあり、東北という地域柄だろうか。

慶長 5 年(1600)、天下分け目の関が原の戦いと共に上杉と最上の戦いが始

まった。文書には残っていないが、この軍道は需要性を増し、人馬の往来、物資の輸送とかなり利用されたと思われる。上杉勢は最上口と六十里越から攻め込み、最上勢の背後を突き圧倒していたが、関が原での豊臣勢の大敗をきっかけに形成は逆転し、上杉勢は米沢に総退却を余儀なくされてしまう。

庄内東禅寺(酒田)の城主、志駄義秀もその1人で、兼統の妻を伴ない10月にこの軍道を通っている。陰暦の10月といえば、今日の11月末から12月初めであり、稜線は氷結し、季節風の一段と身に凍みる完全な冬山であったと考えられる。しかも、庄内を案じ、敗残兵を引き連れての山越えは、氷雪に足を取られ、風によろめき、新雪に身を埋めての行軍だったと思われる。想像するだけでも悲壮な情景が浮かんでくる。

現在、この軍道があったとされる尾根筋の約2/3、即ち鱒淵から草岡までのうち、三角峰(かつては茶畑山)から草岡までは、軍道がそのままではないにしてもほぼ登山路として利用されている。しかし、茶畑山以北の庄内側は寛文年間酒井候の入国以来放棄され、草木に埋もれ戦国動乱の歴史を溶かし消し去って今日に至っている。(※1: 元県文化財調査委員)

#### <参考文献>

- \* 慶長年間の朝日軍道について 佐藤 栄太(1929?)
- \* 朝日連峰 県総合学術調査会編(1964) 330頁 「直江兼統と朝日軍道」 渡辺茂蔵
- \* 鶴岡市史(上巻) 鶴岡市役所(1962) 112頁 第三章第6節から第9節
- \* 日本登山史 白水社 山崎 安治 (1969)
- \* 村報あさひ No.133 朝日村役場(1973)

(2009/12)